

カナダの統合問題に関する社会学的論攷

—多文化主義政策と政治的社会化—

(概要書)

遊 みか



No. 1

No. 1

近年、多くの外国人が日本国内に居住する	ようになった。居住する外国人の数が増える	に連れて、日本の地方自治体や学校などで、	違う文化や言語を持つ人々との相互理解を行	おうとする運動、つまり「多文化主義」	(Multiculturalism)「多文化教育」(Multicultural Education)が盛んに唱えられるよ	うになってきた。「多文化主義」とは一体何	であらうか。	この論文では、世界で始めて政策として多	早稲田大学論文用紙										文化主義を導入したカナダの「多文化主義」	を整理しながら、同様に多文化主義を主に教	育面に採用しているオーストラリアの例も参	考にして「多文化主義」とは何かを明らかに	する事を目的としている。	第1章、1節では「多文化主義」と題して	1924年にホレス・カレンが「文化多元主義」	概念を発表してから、現在にいたる「多文化	主義概念」が生まれるまでの一連の流れにつ	いて整理した。主な社会学者としてチャール
---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	--	----------------------	--------	---------------------	-----------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	---------------------	------------------------	----------------------	----------------------	----------------------



No. 2

No. 2

早稲田大学論文用紙

ズ・テイラー、ユルゲン・ハバーマスの「多文化主義」についての大論争を検証した。次に、1980年代に「多文化主義」を2つに分類したM・M・ゴードンの説を紹介した。彼は多元主義を「リベラル多元主義」と「コ

「ポレイト多元主義」に分けている。また1990年代に活躍している社会学者であるウイール・キムリツカの「多文化主義」の概念も整理した。彼は今までの学者にはない「多文化主義」に「国家の統合」という観点

を加えた点で評価されており、新しい視点を提示した学者である。また彼は「多文化主義」にマイノリティの立場からの視点を加えた事も画期的である。

多文化主義を教育の観点から捕らえた学者としてジェームス・A・バンクスがいる。彼の定義は教育学者たちの間では絶対的なものとなっているが、現実に対応が可能であるかどうかという点に関しては疑問視されており、理想論的であるという指摘も受けている。



No. 3

No. 3

策 導 入 ま で の 道 程 」 と 題 し て 、 フ ラ ン ス が カ	第 2 節 で は 「 カ ナ ダ に お け る 多 文 化 主 義 政	導 き 出 す に い た る ま で の 過 程 を 整 理 し た 。	ナ ダ 政 府 が そ う し た 「 多 文 化 主 義 」 の 定 義 を	を 導 き 出 す に い た っ た の か を 知 る た め に 、 カ	次 い で ど う し て カ ナ ダ 政 府 は そ う い う 定 義	「 多 文 化 主 義 」 の 定 義 と す る 事 に し た 。	カ ナ ダ 政 府 が 定 義 し て い る 「 多 文 化 主 義 」 を	界 で 始 め て 政 策 と し て 多 文 化 主 義 を 導 入 し た	な い 事 が 分 か っ た 。	そ こ で 筆 者 と し て は 、 世	早稲田大学論文用紙		「 多 文 化 主 義 」 の 定 義 は 曖 昧 で 明 確 な 定 義 が	「 多 文 化 主 義 」 の 概 念 を 整 理 し て 行 く 中 で 、	さ れ は じ め た こ と を 整 理 し た 。	を 代 表 と し て 「 批 判 的 多 文 化 主 義 論 」 が 展 開	リ ー ・ カ ン ポ ー ル 、 ピ ー タ ー ・ マ ク ラ ー レ ン	1 9 9 0 年 代 に 入 る と B ・ ア ン ダ ー ソ ン 、 ベ ー	な ど 、 多 方 面 に わ た り 支 持 を 受 け て い た 。	解 決 す る も の で あ る と し て 、 研 究 者 ・ 政 治 家	で あ る 。	多 文 化 主 義 は さ ま ざ ま な 民 族 問 題 を	1 9 8 0 年 代 は 「 多 文 化 主 義 万 能 葉 論 」 の 時 代
--	---	---	--	--	---	--	--	--	---	---	-----------	--	--	--	--	--	--	---	---	--	------------------	--	---



No. 4

No. 4

早稲田大学論文用紙

ナダを支配した（1）ヌーベル・フランスから初め、カナダの全盛期であった（2）ロリエ卿の時代をへて、民族意識の高いフランス系カナダ人がおこした（3）「静かな革命」までを整理した。そしてフランス系カナダ人とイギリス系カナダ人を尊重する事を保証した（4）二言語・二文化主義政策をカナダが導入したことを述べ、最終的にすべての民族を尊重する事を保証した（5）多文化主義政策に至るまでの歴史を整理した。

以上の歴史を見て行く中で、カナダの多文化主義政策は統合政策であった事に気がついた。この多文化主義政策を導入した事でカナダに居移住する様々な民族は統合する方向へ向かったのだろうか。

第2章では「カナダの移民集団と国民意識」と題して、カナダに導入された多文化主義政策に対して民族集団はどういう評価をしていくか、また彼らは統合に向かっているかを明らかにした。



No. 5

No. 5

早稲田大学論文用紙

イ	テ	ン	テ	イ	テ	イ	が	と	り	わ	け	て	高	い	集	団	と	し	て
て	し	ま	っ	た	事	を	明	ら	か	に	し	た	。	こ	の	民	族	的	ア
合	ど	こ	ろ	か	む	し	ろ	分	離	・	独	立	の	方	向	へ	進	ま	せ
団	に	対	し	て	の	愛	着	心	を	増	幅	さ	せ	て	し	ま	い	、	統
イ	デ	ン	テ	イ	テ	イ	、	つ	ま	り	自	分	が	属	す	る	民	族	集
し	た	。	そ	の	結	果	、	多	文	化	主	義	政	策	は	民	族	的	ア
「	統	合	」	の	目	的	を	果	た	す	事	が	出	来	た	か	を	検	証
者	を	比	較	す	る	事	に	よ	り	、	多	文	化	主	義	政	策	が	
の	高	い	集	団	で	あ	る	と	し	て	有	名	で	あ	る	。	こ	の	両
ら	い	で	あ	る	。	ま	た	彼	ら	は	と	り	わ	け	て	民	族	意	識
位	を	占	め	、	イ	タ	リ	ア	系	カ	ナ	ダ	人	と	ほ	ぼ	同	じ	く
な	っ	て	お	り	、	人	口	構	成	の	面	か	ら	見	れ	ば	、	第	5
的	最	近	に	な	っ	て	か	ら	カ	ナ	ダ	に	定	住	す	る	よ	う	に
イ	ナ	系	カ	ナ	ダ	人	を	取	り	上	げ	た	が	、	彼	ら	は	比	較
占	め	る	。	一	方	で	対	照	的	な	民	族	と	し	て	、	ウ	ク	ラ
し	て	お	り	、	人	口	構	成	の	面	か	ら	見	れ	ば	第	4	位	を
比	べ	て	比	較	的	早	い	時	期	か	ら	カ	ナ	ダ	の	地	に	定	住
で	あ	る	。	イ	タ	リ	ア	系	カ	ナ	ダ	人	は	、	他	の	民	族	に
を	比	較	検	討	し	た	。	1	つ	は	イ	タ	リ	ア	系	カ	ナ	ダ	人
第	1	節	、	第	2	節	で	は	、	2	つ	の	対	照	的	な	集	団	



No. 6

No. 6

フランス系カナダ人を取り上げ、彼らの意識		およびフランス系カナダ人が数多く居住する		ケベック州についてまとめた。		第3章では「政治的社会化」子供へ向けて		と題して、統合政策として導入された多文化		主義政策であったが、現在カナダにおいては		民族的アイデンティティをいたずらに刺激さ		せ、分裂を引き起こすものであるとして危険		視されているが、社会学の概念である「政治		的社會化」を採用することによって、必ずし		も分裂を起こすものではないものにならない		ことを説明している。		第1節では「政治的社会化」の定義として、		代表的な「政治的社会化」の定義を整理してい		る。デービッド・イリスhton、ジャック・デ		ニス、R・S・サイゲル、M・ラッシュユ、P・		アルソフ、ハーバート・ハイマン、ロバート・		ヘス、K・P・ラントンの定義を整理した。		1970年代になると「政治的社会化」はD・		C・シュワルツを代表として反動的保守主義	
----------------------	--	----------------------	--	----------------	--	---------------------	--	----------------------	--	----------------------	--	----------------------	--	----------------------	--	----------------------	--	----------------------	--	----------------------	--	------------	--	----------------------	--	-----------------------	--	------------------------	--	------------------------	--	-----------------------	--	----------------------	--	-----------------------	--	----------------------	--

早稲田大学論文用紙



No. 7

No. 7

早稲田大学論文用紙

につな	始める	政治的	と題し	摘した	い事を	的社會	日本	までの	そうし	整理し	つな	第4章	教育	に教育	リキュ	合政策	と努力	げた	第1節
がるも	ことを	と全體	、カナ	たよう	、また	化はど	の明	の教育	て3節	、カナ	がるよ	では「	」と題	面に	ラムに	として	してい	た。	では
のである	述べた	主義	ダの場	な反動	反動的	はどの	治時	内容を	ではカ	ダの場	うな教	「オー	して、	いて政	も政治	多文化	あるオ		多文
として	そこ	―その	合には	保守主	保守主	うな内	代初	に参考	カナ	合には	育体制	ースト	、実	政治的	政治的	主義政	ースト		文化
批判的	第2節	関係の	はシュ	義には	義につ	容のも	期から	にして	ダの各	は反動	ではな	ラリア	に多	社會化	社會化	策を機	ラリア		主義
意見が	は「政	非必然	ワルツ	はつな	ながる	のである	昭和2	証明し	州の教	動的保	い事を	アにお	文化主	を導	を取り	能させ	アの例		政策
		性	が指	がらな	政治	あるか	0年に	て見	育内容	守主義	示した	ける学	義政策	入し、	込ん	せよう	を取り		が導
						を	いたる	せた。	を	に		校	、特	カ	で統	う	上		入さ
																			れる
																			ま



No. 8

No. 8

早稲田大学論文用紙

での一連の流れについて整理した。第2節では、実際にオーストラリアの多文化主義政策において「政治的社會化」が取り込まれている事を、オーストラリアの教育のカリキュラムを参照しながら明らかにした。第3節では、オーストラリアで行われている「政治的社會化」をカナダに採用する事が可能である事をカナダの多文化主義政策と比較しながら証明した。以上見てきたように、「多文化主義」という見ればさまざまな弊害もあるが、それでも「すべての民族を尊重する」という考え方は評価できるものであると思う。日本ではカナダやオーストラリアのように政策はおろか、運動という形でさえも多文化主義はまだ世間に浸透していない。しかしさまざまな外国人が居住するようになり、国際化を迎えて行く中にあり、日本も例外にもれず、様々な民族との共存について考えなくてはならない時期に



No. 9

No. 9

来
て
い
る
と
思
わ
れ
る
。
そ
う
し
た
中
に
あ
っ
て
「
多
文
化
主
義
」
の
概
念
は
研
究
者
だ
け
で
は
な
く
様
々
な
人
々
が
真
剣
に
取
り
組
ま
な
く
て
は
な
ら
な
い
課
題
で
あ
り
、
と
同
時
に
カ
ナ
ダ
や
オ
ー
ス
ト
ラ
リ
ア
が
生
み
出
し
た
よ
う
な
弊
害
を
生
ま
な
い
、
日
本
の
風
土
や
人
々
の
気
質
に
適
し
た
日
本
独
自
の
多
文
化
主
義
を
今
こ
そ
見
つ
け
出
す
時
期
だ
と
思
う
。
こ
う
し
た
多
文
化
主
義
を
見
つ
け
出
す
た
め
に
、
こ
の
論
文
で
執
筆
し
た
カ
ナ
ダ
や
オ
ー
ス
ト
ラ
リ
ア
の
例
が
参
考
に
な
る
こ
と
を
期
待
し
て
い
る
。
早稲田大学論文用紙